

ハワイにおける砂糖革命と多民族化 1850-1920
(重近啓樹先生追悼記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原, 知章 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007067

ハワイにおける砂糖革命と多民族化 1850－1920

原 知 章

1 はじめに

ハワイは、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）において、アジア系や太平洋諸島系などの「マイノリティ」のエスニック集団が、人口の面で「マジョリティ」を構成する数少ない州——いわゆる“Minority-Majority State”——のひとつである。2010年に実施された国勢調査の結果によれば、今日のハワイの人口約136万人の人口構成の上位5位を占めるは、「白人（White）」約34万人（24.7%）、「フィリピノ（Filipino）」約20万人（14.5%）、「ジャパニーズ（Japanese）」約19万人（13.6%）、「ネイティヴ・ハワイアン（Native Hawaiian）」約8万人（5.9%）、「チャイニーズ（Chinese）」約5万人（4.0%）となっている（Hawaii Department of Business, Economic Development and Tourism 2011）。白人、フィリピノ、ジャパニーズが相対的に多いものの、人口構成という観点からみれば、現代のハワイではいずれのエスニック集団もマイノリティであるといえる。

このように特異な人口構成をもつハワイにおけるエスニック関係は、これまで様々な分野の多くの研究者の注目を集めてきた。1920年にハワイ大学社会学部を創設し、ハワイにおけるエスニック関係の研究を先導したロマンゾ・アダムズは、ハワイを、平等な人種関係という「人種に関する非正統的な原則」（Adams 1937: 56）によって特徴づけられる社会として捉え、以後、ハワイはシカゴ学派の社会学者たちにとって「シカゴ理論を実証するための理想的なショーケース」（Persons 1987: 92）となった。20世紀後半になると、ハワイは、人種間の緊張が高まっていたアメリカ本土とは対照的に、様々なエスニック集団が共存する社会として注目されるようになっていった。アメリカ本土で公民権運動が高揚しつつあったところに、ハワイの社会史の古典として知られる『ハワイ・ポノ』を執筆したローレンス・フュークスは、同書の最後を以下の文章で締めくくっている。

ハワイは、出自や肌の色や宗教の如何を問わず、すべての人びとに平等な機会が与えられるというアメリカの革命的なメッセージを体現している。この点においてハワイは、アメリカ全体に対する、そして世界に対する希望である。ハワイは、異なる人種や宗派の人びとが、民主主義のもとで調和して共に暮らし、互いを豊かにするという希望なのである。(Fuchs 1961: 449)

1980年代以降、アメリカ本土で多文化主義をめぐる議論が活発になると、ハワイは多文化社会の生きた実例や模範として、研究者やマスメディアによってしばしば取り上げられるようになった (Rosa 2010)。「ハワイ多文化モデル (Hawai'i multicultural model)」(以下、多文化モデル) と呼ばれるこうした言説において、ハワイは「現実に機能している多文化社会」(Kent 1994: 3)、「輝く色が連なるエスニック・レインボー」(Yim 1992: B1) などと評された。最近刊行された『ハワイの人びとと文化——文化とエスニシティの進化』(McDermott and Andrade eds. 2011) という教科書においても、多文化モデルの立場からハワイの多様なエスニック集団の歴史と文化が概説されている。同書のなかで、編者のジョン・マクダーモットらは、「文化変容 (acculturation)」の概念を念頭に置きつつ、ハワイの多文化社会化のプロセスを次のように総括している。「各々の集団 [エスニック集団] は、それぞれのエスニック文化アイデンティティ (ethnocultural identity) をもってハワイにやって来たのであり、長い時間をかけて進化と結合をとげて、ひとつの多文化社会を形成するに至った」(McDermott and Andrade 2011: xii)。マクダーモットらによれば、18世紀末以降、ハワイに到来するようになった白人は、ネイティヴ・ハワイアン (以下、ハワイアン) によって寛容に受け入れられたのであり、後にハワイアンと白人が築いたハワイ王国においても、「多様な人種に対する寛容性 (multiracial tolerance)」(McDermott and Andrade 2011: xvii) の伝統が継承されたという。ハワイでは、このような伝統を土台として文化変容——エスニック集団の「進化と結合」——が生じ、多文化社会化が進んできたというのである。

最近では、ハワイ出身のバラク・オバマの大統領就任を機に、ハワイは多文化社会として改めて注目されるようになってきている (Haas ed. 2011)。たとえばハワイ観光局が運営するハワイ観光の公式サイトでは、「バラク・オバマのハワイ」というタイトルのページに次のように記されている。

ハワイの島々は風光明媚であるだけでなく、驚くほど多様な人びとが暮らしている場所でもある。プランテーション〔砂糖プランテーション〕の時代から、ハワイは多様な文化をもつ人びとの故郷となってきた。このように外部のものを寛容に受け入れるアロハの文化こそが、バラク・オバマに大きな影響を与えてきたのであり、また、今後も彼に影響を与え続けるであろう。(Hawaii's Official Tourism Site 2012)

実際、オバマ自身、「私の最良の部分、私のメッセージの最良の部分は、ハワイの伝統にもとづいている」(Glauberman and Burris 2009: 4)と述べている。ここで彼が「ハワイの伝統」と呼んでいるのもまた、他文化への敬意を払い、多様な文化を寛容に受け入れる「アロハの文化=アロハ・スピリット」のことである(Glauberman and Burris 2009: 5)。

多文化モデルは、今日では研究者だけでなく、ハワイのマスメディアや一般の人びとの間にも広がりを見せている。しかし他方では、現代のハワイにおけるエスニック関係は、たしかに良好といえるもののいくつかの問題を抱えているという指摘や(Rosa 2010)、むしろ構造的な不平等によって特徴づけられるという指摘もある(Okamura 2008)。多文化モデル批判の急先鋒に立つジョナサン・オカムラによれば、多文化モデルは、現代のハワイにおけるエスニック集団間の構造的な不平等を等閑視した議論である(Okamura 2008)。オカムラは、エスニック集団別の学歴、職業、収入などに関する統計データにもとづいて、1970年代以降のハワイでは、社会経済的地位が高い白人、チャイニーズ、ジャパニーズと、社会経済的地位が低い他の集団——とりわけフィリピン、ハワイアン、サモアン——の格差が固定化してきたことを論証している¹。ただしオカムラは、多文化モデルをすべて否定するわけではない。オカムラによれば、「“アロハ・スピリット”として人口に膾炙している文化規範は、エスニック集団間の関係よりもむしろ、個人間関係においてより重要」(Okamura 2008: 11)であるという。つまり、個人レベルの日常的・対面的な関係のなかに「アロハ・スピリット」を見いだすことはできるものの、それを強調しすぎることは、エスニック集団間の構造的な不平等を覆い隠すことになるというのである。

以上に概観したように、多文化モデルが現代のハワイのエスニック関係に関する支配的言説として広がりを見せてきた一方で、それを批判する議論も現わ

¹ なお、マクダーモットらは、こうしたオカムラの議論こそ、ハワイの社会を静態的に捉えた単純な議論であると批判している(McDermott and Andrade 2011: xviii)。

れてきた。これらの先行研究をふまえつつ、ハワイにおいて多様なエスニック集団がどのような関係を築いてきたのかを再検討し、ハワイにおけるエスニック関係の歴史と現在をより包括的に捉えなおそうとすることには、一定の学問的意義があると考えられる。その営為からは、ハワイ研究という枠組みをこえて、エスニック関係研究の理論的枠組に対する示唆、あるいは、多様な人種・民族的背景をもつ人びとがどのように共生していくことができるのかという現代世界の根源的問題に対する示唆を得ることもできるにちがいない。

本稿では、以上の問題意識にもとづいて、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのハワイにおける多民族化のプロセスに焦点を当てる。世界各地からハワイへの移民が急増したこの時期——おおむね1850年ごろから1920年ごろにかけての時期——は(表1)、ハワイ観光の公式サイトで触れられていた「プランテーションの時代」、すなわちハワイにおいて砂糖産業が発展し、砂糖プランテーションが広がりを見せた時代であり、この砂糖産業の発展と多民族化の進展は相即不離の関係にあった。

表1 ハワイの入移民数(1855-1919)

(単位:人)

	中国人	ポルトガル人	日本人	コリアン	フィリピン人	その他	合計
1855-59年	282	-	-	-	-	-	282
1860-69年	1,122	-	148	-	-	169	1,439
1870-79年	8,806	599	-	-	-	746	10,151
1880-89年	18,567	9,960	10,600	-	-	3,320	42,447
1890-99年	9,355	367	57,699	-	-	613	68,004
1900-09年	2,783	2,596	76,538	7,424	639	4,547	94,527
1910-19年	1,151	2,777	27,657	587	29,161	9,466	70,799

Menton and Tamura (1999: 105) をもとに作成

しかし、それではこの時代にハワイに到来した移民たちは、多文化モデルにおいて論じられるように、個々のエスニック文化アイデンティティをもってハワイにやって来たのだろうか、あるいは「アロハ・スピリット」のもとでハワイ社会に寛容に受け入れられたのだろうか。本稿の目的は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのハワイにおける砂糖産業の発展と多民族化のプロセスを改めて振り返ることを通じて、多文化モデルの前提となっているこれらの歴史認

識を再検討することにある。

本稿の構成は以下のとおりである。2章では、まず、砂糖産業が興隆する以前のハワイの歴史的背景について述べる。3章では、「砂糖革命」と呼ぶべき社会・文化的なインパクトをハワイにもたらした砂糖産業の発展のプロセスをたどる。4章では、砂糖プランテーションの労働者として世界各地の人びとがハワイに到来し、多民族化が進んだプロセスを概観する。5章では、砂糖プランテーション経営者によるプランテーション統治の戦略とその思想的背景を取り上げる。6章では、前章で取り上げたプランテーション統治の戦略とハワイの人びとのエスニック文化アイデンティティの関わりについて論じる。最後に、以上の議論をふまえて、多文化モデルの前提となっている歴史認識を再検討する。

2 歴史的背景²

北太平洋のほぼ中央に位置するハワイ諸島は、約2,400kmにわたって連なる137の島々からなる³。今日の日本にとって、ハワイは身近な海外観光地のひとつであるために忘れられがちであるが、ハワイは、地理的にはいずれの大陸からも遠く離れた位置にあり、その点では世界のなかでもっとも孤立した地域のひとつであるといえる。そのハワイの島々に、4,000km近くも離れた南太平洋のマルケサス諸島から最初に人間が移住してきたのは、西暦300年頃のことであったと考えられる。その後、マルケサス諸島からの移住が少なくとも200年以上にわたって続いたあと、西暦1100年頃から数百年にわたって、今度はソシエテ諸島からの移住が続いたというのが、現在考えられているポリネシア人のハワイへの移住の有力なシナリオである（Okihiro 2008: 49）。後にハワイアンと呼ばれることになるこれらのポリネシア人は、優れたカヌー製作技術と航海術を有し、漁労と農耕を主な生業とし、王、貴族、呪術＝宗教的職能者、平民、奴隷などによって構成される階級社会を築いた。

² 本章以降のハワイの歴史の記述は、基本的に以下の文献に依拠している（Daws 1968; Fuchs 1961; Menton and Tamura 1999; 中嶋 1993; Nordyke 1989; Okihiro 2008; タカキ 1986; 矢口 2002; 山中 1993）。

³ ハワイ諸島は、その北西端に位置するミッドウェー環礁をのぞいてハワイ州を構成する。ハワイ州のなかで、現在、人間が恒常的に生活しているのは、ハワイ諸島の南東端に位置する7つの島々、すなわちニイハウ島、カウアイ島、オアフ島、モロカイ島、ラナイ島、マウイ島、そしてハワイ島である。

ソシエテ諸島からのポリネシア人の移住の流れが途絶えた後、外部社会と接触することなく、自己完結的な社会を築き、独自の文化を育てていったハワイアン社会に西洋文化のインパクトがもたらされる契機となったのは、よく知られているように、イギリスの探検家、ジェームズ・クックによるハワイの「発見」であった。1778年、ソシエテ諸島からアメリカ大陸北西海岸に向かっていったクックは、偶然ハワイに到達し、以後、ハワイの存在は、西洋において広く知られるようになった。1794年には、同じくイギリス人のウィリアム・ブラウンが、オアフ島の南側に位置する小さな村落であったホノルルに、西洋人としてはじめて入港した。ホノルルという地名は、ハワイ語で「守られた入江」を意味する。その名のとおり穏やかで深い海に面したホノルルの港は、ハワイきっての良港であり、その後、多くの西洋人がホノルル港を利用するようになった。ホノルルは、19世紀初頭には3,000人ほどの人口をかかえる村落にすぎなかったが（Bushnell 1993）、その後、太平洋最大の港湾都市へと成長をとげ、1850年にはハワイ王国の首都となった。1875年に出版されたハワイのガイドブックでは、ホノルルは次のように描写されている。

ホノルルはハワイ王国の首都であり、ハワイ諸島のなかで都市の名に値する唯一の場所である。ハワイを訪れる旅行者は、ここに上陸し、ここでハワイとハワイアンの第一印象を抱くのである。交易拠点としてのホノルルは、北アメリカとアジア、カリフォルニアとオーストラリアやニュージーランドの中間に位置しており、北太平洋の〔交通の〕要衝として、非常に有利な立場にある。（Whitney 1875: 6）

こうしてハワイは、ホノルルを中心に、太平洋を行き交う人、モノ、情報などのフローが幾重にも重なる結節点となっていった。西洋との接触以後のハワイにおける主要な産業は、時代の流れとともに移り変わってきたが、そのいずれもが、外部社会とのつながりに依存してきた点では同根であった。クックがハワイに到達した頃には、アメリカ、イギリス、フランス、ロシアなどの商船が、アメリカから中国に向けてラッコやビーバーなどの毛皮を輸出し、中国から茶や陶磁器などを輸入する、いわゆる「毛皮交易」が盛んに行なわれていた。ハワイはまず、これら毛皮交易の商船の補給基地として利用されるようになった。当時、ハワイには、中国人が好んで家具や扇子、香木や漢方薬の材料に利用していた白檀（サンダルウッド）が群生していたことから、やがてアメリカ

を出港した商船は、ホノルル港で水や食料のほかに白檀を積んで中国へと向かうようになった。西洋の商人に白檀を提供したハワイの貴族たちは、その対価として西洋の品々を受け取った。1810年にハワイ諸島を統一し、ハワイ王国を築いたカメハメハ一世は、この白檀交易を独占したが、カメハメハ一世の死後、ハワイの貴族たちは再び白檀交易に乗り出した。その結果、ハワイの白檀は枯渇し、貴族たちは西洋の商人に対して莫大な負債を抱えることになった。

乱獲によるラッコやビーバーの激減などのために毛皮交易が衰退し、白檀もハワイからその姿を消しつつあった頃から、ハワイは捕鯨船の補給基地として利用されるようになった。ハワイを補給基地としたのは、主にアメリカの捕鯨船であった。アメリカの捕鯨船はもともと大西洋を主な漁場としていたが、乱獲による漁場の荒廃、そして日本列島近海における豊かな漁場の発見により、1820年頃から太平洋に進出しはじめた。当時の日本は、いうまでもなく鎖国体制下であり、アメリカの捕鯨船は日本に寄港することができなかった。そこでハワイが、捕鯨基地として注目されるようになったのである。しかし19世紀後半に入ると、乱獲によるクジラの減少や、灯油が鯨油にとって代わるようになったことなどを背景として、捕鯨は急速に衰退していった。捕鯨の衰退は、太平洋最大の捕鯨基地として発展を遂げていたハワイの経済に大きな打撃を与えた。そうしたなか、ハワイ経済を担う主要産業として成長を遂げていったのが砂糖産業であった。19世紀後半から20世紀初頭にかけての砂糖産業の興隆は、世界各地から多くの移民をハワイに引き寄せることになり、ハワイ社会の多民族化のプロセスに決定的な影響を与えることになった。

3 砂糖革命

そもそもサトウキビは、商品作物としては特異な性質を有している。川北稔の言葉を借りるならば、サトウキビは「旅する運命」(川北 1996: 28)にある作物である。まず、サトウキビは、米や麦などと比べると非常に重くかさばり、しかも、収穫後に加工せずに放置しておくと、すぐに品質が低下してしまう作物である。したがってサトウキビは、そのまま大量に流通させたり、備蓄しておくのには向いておらず、搾り汁から砂糖や糖蜜を作り出すことによって始めて、商品作物として高い価値を持つようになる。また砂糖は、栄養学的な観点からすれば、米や麦など他の炭水化物系の作物と異なり、主食にはなりえず、生産地域内で消費できる量は限られる。つまり砂糖は、他地域に輸出され

ること高い価値をもつようになる。さらにサトウキビは、地味を非常に消耗させる作物であり、砂糖産業は、今日のように機械化が進む以前はきわめて労働集約的な産業であった。そのため、砂糖産業の拠点となった砂糖プランテーションは、新しい土地と労働力を求めて次々と新たな地域に移動していくと同時に、それらの地域において「砂糖革命 (Sugar Revolution)」と呼ぶほどのインパクトの社会・文化的な変動を引き起こしてきた (Higman 2000; cf. Menard 2006)。ハワイもその例外ではなかった。

サトウキビ自体は、西洋人が到来する以前から、すでにハワイアンによって栽培されていた。しかしサトウキビから砂糖を大量生産し、他地域に輸出する砂糖産業をハワイにもたらしたのは、西洋人であった。そもそも西洋において砂糖が本格的に利用されるようになったのは、16世紀以降のことである (ミンツ 1988)。砂糖の大量生産を目的としたプランテーションは、以後、地中海の島々から大西洋沖にあるマデイラ諸島やカナリア諸島へ、そしてブラジルやカリブ海の島々へと広がりを見せていった。このように大西洋をこえてヨーロッパからアメリカ大陸へと広がっていった砂糖プランテーションが、ハワイに到達したのは、先に触れたように19世紀のことであった。

ハワイにおける最初の成功した砂糖プランテーションとして知られているのは、1835年にアメリカ人によってカウアイ島に築かれたものである。その後、ハワイでは徐々に砂糖プランテーションが増加していった。表2からは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ハワイにおいて砂糖産業が急激な発展をとげたことが分かる。この時期に、砂糖は、ハワイのもっとも重要な、そして事実上唯一の輸出品へと成長した。

表2 ハワイの砂糖プランテーション (1856-1990)

年	プランテーション数	サトウキビ収穫面積 (単位：エーカー)	砂糖生産量 (単位：トン)
1856年	7	2,150	277
1867年	29	10,006	12,115
1880年	62	28,200	28,200
1890年	63	87,016	129,899
1900年	59	128,024	289,544
1910年	52	214,312	582,196
1920年	49	236,510	546,273
1930年	46	251,533	1,129,899
1939年	36	235,227	994,173
1949年	28	213,354	955,890
1962年	26	228,926	1,120,011
1974年	20	224,227	1,128,529
1980年	14	217,718	1,059,735
1990年	12	161,991	819,631

Dorrance and Morgan (2001: 6) をもとに作成

ハワイにおける砂糖産業の発展は、プランテーションを築く土地、砂糖を売る市場、そしてプランテーションで働く労働力が得られることによって初めて可能となったものであった。このうち、まず土地に関していえば、そもそもハワイでは、すべての土地は国王の管理下におかれていた。そのため外国人は、国王の承認を得てはじめて、王国内の土地を利用することができた。ただし、その際に認められたのはあくまで土地の利用権であって、所有権ではなかった。しかし、1830年代以降、ハワイで西洋型の政治制度が本格的に導入されるようになる、白人の政治的影響力が高まっていき、やがて西洋的な土地私有の観念にもとづく土地制度改革が進められていった。その結果、1850年には、外国人による土地の賃貸や取得も認められるようになり、以後、白人はハワイの土地を次々と手に入れていった。そしてそれとともに、砂糖プランテーションの数も増えていった。この時期に、王国政府の要職に就いたり、砂糖プランテーションを経営するなど、ハワイにおいて大きな政治・経済的権力を持つようになったのは、ハワイ語で「ハオレ (Haole)」と呼ばれた白人であり、その多く

を占めたのは、アメリカからハワイにやってきた人びととその子孫であった。

砂糖産業の発展とともに、ハワイとアメリカの結びつきは、ますます緊密になっていった。アメリカは、ハワイの砂糖産業にとって重要な市場として位置づけられたのである。特に1848年のカリフォルニアにおけるゴールドラッシュ以降、アメリカ西海岸の人口が急増したこと、そして南北戦争によって、アメリカ南部で生産されていた砂糖が北部に供給されなくなったことを背景に、アメリカでは、ハワイ産の砂糖に対する需要がしだいに高まっていった⁴。さらに1875年には、アメリカとハワイ王国の間で「米布互恵条約」が締結され、この条約のもとで、ハワイの砂糖を非関税でアメリカに輸出することが可能になった。米布互恵条約以後、ハワイにおける砂糖生産量は急増した。

しかし、1890年に、アメリカにおいて「マッキンレー関税法」の名で知られる保護関税法が成立すると、ハワイからアメリカに輸出される砂糖に再び関税が課せられることになり、ハワイの砂糖産業は深刻な不況に陥った。危機感をつのらせた砂糖プランテーションの経営者たち（以下、プランター）は、ハワイをアメリカに併合させることによって事態の打開を図ろうとした。1893年には、プランターを中心とするハワイの一部の白人勢力がクーデターを起こし、王国政府を打倒して、ハワイ共和国を樹立した。アメリカによる国内砂糖産業の保護政策は、ハワイ王国を崩壊へと導く大きな要因になったといえよう。その後、1898年に、ハワイ共和国がアメリカに併合されたことによって、ハワイの砂糖産業は、アメリカという広大な市場への進出が保証されることになった。

ところでプランターたちは、共通の利害関係を持ちつつも、それと同時に、互いにビジネス面の競争相手という関係にもあった。特に1875年の米布互恵条約以後、砂糖プランテーションが急増するなかで、プランテーション間の競争も激しくなっていった。そしてこのプランテーション間の競争を通じて、各プランテーションの労働力や必要物品の調達から砂糖の輸出までを手がける5つの企業（Alexander & Baldwin, American Factors, Castle & Cooke, C. Brewer, Theo H. Davies）が急成長を遂げていった。これら5つの企業は、やがてハワイの砂糖プランテーションの大半を所有するようになり、「ビッグ・ファイブ（Big Five）」と称されるようになった。1911年に、アメリカ本土からハワイを訪れたジャーナリストのレイ・ベイカーは、ビッグ・ファイブによるハワイ経

⁴ ジェラルド・ホルンは、南北戦争によって引き起こされたアメリカ国内の砂糖や綿の不足こそが、19世紀後半におけるアメリカの帝国主義的膨張の最大の要因であり、ひいてはアメリカによるハワイ併合をもたらしたと論じている（Horne 2007）。

済の支配について、次のように述べている。

ハワイは太平洋の楽園……と呼ばれてきた。それはたんに自然の美と奇観の楽園であるのみならず、近代的な産業合同の楽園でもある。合衆国のどこにも、ハワイの砂糖産業ほどに支配力のある単一の産業はないし、おそらくほかのどこにも、中央集権的な財産の支配がこれほど完全な状態に達しているところはないだろう。(Baker 1911: 28)

この時期のビッグ・ファイブは、砂糖産業だけでなく、ハワイの交通、通信、金融、エネルギー、観光など様々な分野に進出し、まさに「中央集権的な財産の支配」を確立していた。ハワイにおける砂糖革命は、少数の白人が政治・経済的権力を独占する寡頭制の出現を帰結したのである。

4 プランテーション労働者の「輸入」

前章で見たように、19世紀半ば以降のハワイでは、大規模な砂糖プランテーション経営に必要な土地と市場が開拓されていった。そしてそれとともに、ハワイの砂糖プランテーションへの投資熱も高まっていった。このような状況下においてプランターにとって大きな問題となったのが、労働力の確保であった。当初、プランテーションの労働者として想定されていたのは、主にハワイアンであった。しかし、ハワイアンのなかには、プランテーションで長時間、低賃金で働くことを拒否する者が多かった上に、その人口は急激に減りつつあった。1778年にジェームズ・クックが到来した頃のハワイの人口は、考古学的知見にもとづく最近の研究によれば、11万～15万人程度であったと考えられる⁵ (Dye 1994)。しかしその後、ハワイアンの人口は、とりわけ西洋人がハワイにもちこんだ様々な病気——百日咳、はしか、おたふく風邪、天然痘、インフルエンザなど——のために、減少しつつあった。また、ハワイアンのなかには、西洋人の到来以後の急激な社会変化を背景として、アルコール中毒などに陥り、命を落とす者も少なくなかった。さらに、ゴールドラッシュ以降は、アメリカ西海岸で働くためにハワイを離れる者も増えつつあった (Barman and Watson 2006)。こうしてハワイアンの人口は激減し、1850年には約8万2,000人になっていた

⁵ 当時のハワイの人口については諸説ある。なかには80万人を超えていたと主張する論者もいる (Stannard 1989)。

(Jarves and Whitney 1872: 203)。

深刻な労働力不足に直面しつつあったハワイのプランターは、やがて世界各国から労働者を「輸入」するようになった。トリニダード・トバゴの初代首相であり、歴史家でもあったエリック・ウィリアムズはかつて、アメリカ大陸やカリブ海地域では「砂糖がなければ黒人はいなかった。だが同時に、黒人がいなければ砂糖もなかった」(Williams 1942: 13)と述べた。しかしハワイの場合、砂糖産業が急激な発展を遂げた19世紀後半に、プランテーション労働者として黒人奴隷を導入することは、もはやできなかつた。西洋各国において奴隷制廃止運動が高まりつつあり、イギリスの植民地やアメリカでは、「クラー」と呼ばれた中国人やインド人の非熟練労働者を導入する動きが活発になっていた。

こうした状況のなか、ハワイ王国では、1850年に中国人の労働者の導入を認可した。これを受けてハワイのプランターは、1852年に最初の大規模な契約労働者として、中国人をプランテーションに導入した。以後、1878年からはポルトガル人、1885年からは日本人の労働者が大規模に導入されるようになった⁶。その後は、プエルトリコ、朝鮮半島、フィリピンからも多くの労働者が導入された(表1、表3)。その他にも、ギルバート諸島、ドイツ、スペイン、ノルウェー、ロシアなど世界各国の人びとが砂糖プランテーションで働くためにハワイに到来した。

⁶ これに先立って、1868年に153名の日本人が砂糖プランテーションで働くためにハワイに渡っている。いわゆる「元年者」として知られる彼らは、明治政府から海外渡航の許可を得ていなかった。その後、明治政府公認のハワイへの渡航が始まったのは、1885年のことであった。

表3 ハワイの砂糖プランテーション労働者数の推移（1872-1932）

（単位：人）

	1872年	1882年	1892年	1902年	1912年	1922年	1932年
ハワイアン	3,186	2,575	1,717	1,493	1,297	966	615
白人	—	834	409	1,032	940	942	900
中国人	446	5,037	2,617	3,937	2,744	1,487	706
ポルトガル人	—	637	2,526	2,669	4,378	2,533	2,022
日本人	—	15	13,019	31,029	28,123	16,992	9,395
プエルトリコ人	—	—	—	2,036	1,695	1,715	797
コリアン	—	—	—	—	1,666	1,170	442
フィリピン人	—	—	—	—	4,630	18,189	34,915
その他	214	145	248	46	1,870	408	155
合計	3,846	10,243	20,536	42,242	47,343	44,402	49,947

Lind (1980: 82) と Takaki (1990: 40) をもとに作成

世界各国からプランテーション労働者とその家族が流入するにつれて、これらの人びとを主な対象にした教育者・宗教家・商人などもハワイにやって来るようになった。19世紀後半は、船舶・鉄道や電信の発達、万国郵便連合の創設など、交通・通信のシステムが革命的な発展を遂げて、ベネディクト・アンダーソンがいうところの「初期グローバル化」が進んだ時期であった（梅森編 2007）。初期グローバル化と砂糖産業の興隆を大きな背景として、19世紀後半以降のハワイでは、世界の様々な国々から移民が到来するようになったのである。

5 分断統治策と「プランテーション・ピラミッド」

それにしてもなぜ、プランターは、このように世界の様々な国々から労働者を導入したのだろうか。そこには、いくつかの理由があった。たとえば、契約労働者として最初に導入された中国人労働者のなかには、契約期間を終えるとプランテーションを離れてホノルルに移ったり、中国に帰国する人びとが少なくなかった。そのためプランターは、プランテーションに長期間とどまる労働者を求めて、ポルトガル人を導入するようになった。また、日本人労働者の大規模な導入に関しては、プランターの思惑だけでなく、ハワイと日本の連邦化を構想していた当時のハワイ王国の国王カラカウアの意向も反映されていたと

いわれる⁷。1898年にハワイがアメリカに併合された後には、アメリカの諸法がハワイにも適用されるようになり、プランターはその法的制約のもとで、労働者の輸入を進めなければならなくなった。たとえば1900年には、ハワイにおいても、アメリカ本土と同様に契約労働が禁止されることになった。既存の労働契約も無効となり、プランテーションを離れてホノルルやアメリカ本土に移住する人びとが多数現われた。また、当時の連邦法では、中国人の移民が禁止されていたため、ハワイのプランテーションにおいても、中国人労働者を導入できなくなった。そうした理由もあり、1900年以降は、アメリカの統治下にあったプエルトリコやフィリピンから労働者が導入されるようになった。

このように、ハワイのプランターが世界の様々な国々から労働者を導入した背景には、様々な理由があったが、最大の理由として挙げられるのは「分断統治策 (divide and rule)」と呼ばれる労務管理策の採用であった。周知のように、分断統治策は、とりわけ少数の支配者層が多数の被支配者層を統治する際に、古くから用いられてきた統治戦略である。プランターは分断統治策のもと、あえて様々な国々から労働者を導入して労働者を「分断」することによって、彼らが賃金や労働条件の向上を目的として一致団結して交渉やストライキなどに向かうことを防ぎ、労働者にかかるコストを抑制しようとしたのであった。当時のアメリカ本土やその他の西洋諸国では、労働運動が活発に展開されていた。特にアメリカ本土では、人種やエスニシティをこえた労働者の連帯が見られるようになっており⁸、労働運動はヨーロッパ諸国と比べて暴力的な様相を呈していた (Fantasia and Voss 2004: 136)。こうした状況を熟知していたプランターは、ハワイにおいても同様の労働運動が展開されることを警戒し、分断統治策をとったのである。この時期のプランターの見解を代表する雑誌であった『プランターズ・マンスリー』では、分断統治策の必要性が、次のように端的に述べられている。「私たちは、労働者を混ぜ合わせる必要性を特に強調する。様々な国々の人びとを雇うことによって、労働者の間での共謀の危険が少なくなるし、雇主は、おおむねより良い規律を保つことができる」 (Alexander et al. 1883: 245)。

プランターは、こうして分断統治策のもとで、様々な国々から労働者を導入

⁷ ただし、当時の資料を再検討した渡辺礼三によれば、1885年から始まった日本人の大規模なハワイ移民がカラカウアの意向によるものだという通説は、「ひどく事実を逸脱したもの」(渡辺 1986: 405) であるという。

⁸ たとえば、19世紀末期のアメリカにおける最大の労働者団体であった「労働騎士団 (Knights of Labor)」には、白人だけでなく、黒人や中国人も加わっていたという (ウェザーズ 1999: 12)。

し、彼らを、しばしばエスニック集団別のキャンプ（居留集落）に住ませた。これらのキャンプは、プランテーションにおける階層関係を反映する形で配置されることも多かった。20世紀初頭のハワイにおける砂糖プランテーションの住居を再現展示しているハワイ・プランテーション・ビレッジというオアフ島の野外博物館のパンフレットでは、当時のプランテーションにおける典型的な住居の配置が、次のように述べられている。

当時のプランテーションの住居の配置では、まず、マネージャーがプランテーション全体を一望することができる丘の上に大きな住居を構えた。マネージャーの住居の下には、労働者を監督する立場の「ルナ（Luna）」の住居が位置し、そしてその下の平坦な場所には、まったく同じ形をした木造の労働者用住居や、独身者用の共同宿舎が位置していた。（Hawaii's Plantation Village 2012）

ミルトン・ムラヤマの表現を借りるならば、このような住居の配置は「プランテーション・ピラミッド」（Murayama 1988: 96）、すなわちプランテーションにおいて形成された白人を頂点とする階層的な社会構造を可視化したものに他ならなかった。プランターは、労働者をプランテーション・ピラミッドの下層に位置づけ、エスニック集団別のキャンプを設けただけでなく、しばしばエスニック集団別に異なる仕事を割り当てた。また、同じ仕事を割り当てた場合でも、エスニック集団間に賃金格差を設けた。たとえば、ある砂糖会社の男性熟練労働者の平均月給は、1926年当時、白人が208ドル、ポルトガル人が76ドル、日本人が69ドル、フィリピン人が51ドルであった（Jung 2006: 66）。

さらに、プランターは、エスニシティを様々な形で利用することによって、労働力を最大限に引き出そうと試みた。たとえば、ある砂糖プランテーションでは、「民族的自尊心刺激計画」なる試みが実行されたことがあった（タカキ 1986: 104）。これは、プランテーション労働者と「ルナ」と呼ばれた現場監督が集まる場所に掲示板を立てて、そこに前日の出勤者の数を、エスニック集団別に、毎朝書き込むという試みであった。そうすることによって、労働者は「民族的自尊心」を刺激され、他のエスニック集団への対抗意識から積極的に出勤するようになるはずだ、とプランターは考えたのである⁹。

⁹ 当時のプランテーション労働者は、仮病を使ったり見せかけの服従をするなど様々な形で仕事をサボタージュする、いわゆる「弱者の武器」（Scott 1985）を用いた抵抗をしばしば行っていた

このようなプランターの分断統治策は、白人至上主義的な温情主義によって裏打ちされていた。プランターは、砂糖プランテーションの経営を、ハワイを文明化するための「白人の責務」として捉えていた。ロナルド・タカキは、当時のプランターの思考様式について次のように述べる。

「アングロ・サクソンの血が一滴でもあるかぎり、支配するのは当然である」とプランターたちは宣言した。プランターたちは労働者が魂も感情ももち、したがって人間らしい扱いをうける権利が当然あることを認めた上で、自らを「より強い人種」の構成員として自己確認して、仲間のプランターたちに向かって労働者に「慈愛」を施すようにと力説した。彼らは誇らしげに「白人文明」をハワイにまで広げたと主張した。砂糖王国では白人が非白人労働者の指揮者であり温情主義的管理者でなければならない、とプランターは論じた。(タカキ 1986: 99)

19世紀後半から20世紀初頭にかけて急激に進んだハワイ社会の多民族化のプロセスとは、このような温情主義のもとで、少数の白人が多数の非白人を統治するプランテーションがハワイを覆っていったことを意味した。白人の温情主義的な統治のまなざしは、食生活や就寝時間など非白人労働者の日常生活全般におよぶ包括的なものであった。みずからを「より強い人種」と認識しつつ、大量の非白人労働者を必要としていた白人のプランターは、その矛盾を、温情主義によって裏打ちされた分断統治策と包括的な労務管理によって解決しようとしたのである。

6 エスニック文化アイデンティティ

前章で見たプランテーション・ピラミッドは、ハワイの人びとの「エスニック文化アイデンティティ」(以下、アイデンティティ)のありように多大な影響を及ぼしてきたと考えられる。そもそも、プランテーション労働者は、白人によってあらかじめ「中国人」「ポルトガル人」「日本人」「フィリピン人」などとカテゴリー化され、そうしたカテゴリーにもとづいてプランテーション・ピラミッドに編制されていった。このことが、ハワイの人びとのアイデンティティ

(タカキ 1986: 191-6)。

のありように密接に関わってきたことをよく示す例として、ハワイにおける「ポルトガル人」というカテゴリーの位置づけを挙げることができる。前章までの記述からも分かるように、長らくハワイでは、「ポルトガル人」は「白人」とは別のカテゴリーとして位置づけられてきた¹⁰。今日においてもハワイでは、「私たち（彼ら）ポルトガル系はハオレ（白人）とは異なる」という語りを、日常会話のなかで耳にすることができる。かつては、「ポルトガル人／白人」の区別は、日常会話における自他認識というレベルにとどまらなかった。砂糖プランテーションにおいてポルトガル人は、白人とは異なる仕事や異なる賃金を割り当てられていたのである。出身地、身体的特徴、文化などの点から考えれば、ポルトガル人は、他のヨーロッパ移民と同様に「白人」として位置づけられる可能性もあったはずである。しかし実際は、そうはならなかった。このように、白人によって「非白人」としてカテゴリー化されて、プランテーション・ピラミッドに位置づけられたことは、ハワイにおけるポルトガル人のアイデンティティに深い影響を及ぼしてきた。同様に、他の人びとのアイデンティティについても、白人によるカテゴリー化とそれにもとづくプランテーション・ピラミッドへの編制が深く影響してきたと考えてよい。

プランテーション・ピラミッドとハワイの人びとのアイデンティティの関係について考える際にもう一点考慮しなければならないのは、これらの人びとの多くは、ハワイに到来する以前は「村の境界をこえたことさえなかった」（タカキ 1986: 43）という点である。ここから推測できるように、白人によって同一集団として位置づけられた人びとの間には、文化やアイデンティティの面で少なからず差異があった。「フィリピン人」と一括されつつも、文化的な差異が顕著であったイロカノ（Ilocano）、タガログ（Tagalog）、ビサヤ（Visayans）というエスニック集団のケースは分かりやすいが、たとえば「日本人」の場合も、19世紀末から20世紀初頭にかけてハワイに渡った人びとの文化的な地域差は少なくなかった。このことをふまえるならば、ハワイに渡った人びとは、他集団との間で異文化接触と文化変容を経験しただけではなく、自集団の内部においても、異文化接触と文化変容を経験することになったという点に目を向ける必要が出てくる。つまり、ハワイ社会全体や、あるいは個々のプランテーションだけでなく、同じ「日本人」とされた人びとがハワイにおいてつくりあげたコミュニティもまた、一種の「コンタクト・ゾーン（contact zone）」（Pratt 1992）

¹⁰ ハワイの公的な人口統計調査においても、1930年まで「ポルトガル人」と「白人」は区別されていた（Nordyke 1989: 46）。

として捉える必要があるのだ。実際、ハワイにおける主流の「日本文化」は、日本各地から（そしてその他の地域から）ハワイにもたらされた多様な地域文化が混交するなかで形成されたものであった。

ハワイの日本人は、各県出身者の寄合い世帯で、その性格、風習や日常用語、アクセントなども多少ずつ異ったものを持っていた。それらが長い間に混り合って、ハワイの日本人特有のものを作り出した。用語は人数の最も多い広島や山口のことばが、自然的に中心となって、種々混交し「ハワイの日本語」というような趣きのあるものとなっている。（ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964: 315）

同一集団とされた人びとの間での異文化接触は、上記のような混交的な文化だけではなく、ときには文化摩擦をも生み出した。たとえば今日のハワイでは、「私たち（彼ら）沖縄系は日系とは異なる」という語りを聞くことができるが¹¹、その背景には、第2次世界大戦以前のハワイにおいて、沖縄出身者が日本本土出身者から厳しい偏見・差別にさらされた事実があった¹²。当時、日本本土出身者の多くは、沖縄出身者の言語、食、よそおい、身体的特徴などを有徴化し、沖縄出身者を同じ「日本人」とはみなさなかつたのである（原 2005）。

ただしさらにいえば、実は沖縄出身者も、文化やアイデンティティの面で一枚岩であったわけではなかつた。同じ沖縄出身者といっても、琉球王国時代の士族の子孫と農民の子孫の間、あるいは、封鎖性が高い自律的なコミュニティを形成していた個々の村々の出身者の間には、文化的な差異が少なからず見られた。そのため、本稿で詳述する余裕はないが、実は沖縄出身者の間でも、やはり混交的な文化の形成や文化摩擦は生じたのである。このような重層的な異文化接触と文化変容は、多かれ少なかれ他の集団においても生じていた。つまり、ハワイの人びとは、プランテーション・ピラミッドにおいて重層的な異文化接触と文化変容を経験するなかで、アイデンティティを形成していったと考えられるのである。

¹¹ ただし、今日のハワイでは、「私たち（彼ら）沖縄系は日系に属している」と語る人びとも少なくない。

¹² ユキコ・キムラによれば、「すべての他府県出身者が沖縄出身者を劣った集団としてみなしていたわけではなかつた」（Kimura 1992: 66）という。たとえば、キムラによれば、福岡出身者と熊本出身者は、沖縄出身者に対して比較的友好的であった（Kimura 1992: 66）。

7 おわりに

これまで見てきたように、砂糖産業の発展は、砂糖革命と呼びうるインパクトの様々な社会・文化的変動をハワイにもたらした。現代のハワイが特異な人口構成をもつようになった最大の要因もまた、この砂糖革命にあったといえる。ソシエテ諸島からのポリネシア人の移住が途絶えた後、数百年にわたって孤立した社会として存続してきたハワイは、西洋人の到来以後、当時、世界規模に拡大しつつあった資本主義経済システムに組み込まれていった。言い換えれば、ハワイの自己完結的な経済システムは、「外部」へと依存する経済システムへと変貌を遂げていったのであり、砂糖産業の発展は、そうしたハワイ社会の「外部」への依存を決定づけた出来事であった。

ハワイの砂糖プランテーションでは、ハワイアン的人口減少を大きな背景として、労働力もまた「外部」へと依存しなければならなくなった。世界的にポスト奴隷制への移行と初期グローバル化が進んでいたなかで、白人プランターはアジアを中心として世界各地に労働力を求めた。そして彼らは、世界各地からハワイに到来したプランテーション労働者たちに故国の文化を保持することを「寛容」に認め、その結果、ハワイの多文化社会化が進んだ。

しかし、これまでの議論から明らかなように、この「寛容」とは、温情主義に裏打ちされた分断統治策というプランテーション統治の戦略にもとづくものであった。19世紀後半から20世紀初頭にかけてのハワイの多文化社会化のプロセスとは、白人が頂点に位置する「プランテーション・ピラミッド」、すなわちエスニック集団間のバウンダリーに沿う形で人びとが階層的に配置された社会構造の形成のプロセスに他ならなかった。そこでは、個々のエスニック集団の間だけでなく、白人と非白人の間のバウンダリーが大きな意味をもったのであり、また、ときには「日本本土出身者／沖縄出身者」のように、エスニック集団内部におけるバウンダリーが前景化することもあった。このように重層的なバウンダリーが形成されるなかで、プランテーション労働者は、単なる労働者としてではなく、「エスニック」な労働者として「規律・訓練 (discipline)」されていった (cf. フーコー 1977; ストラー 2007)。この時期のハワイの人びとのアイデンティティは、プランテーション・ピラミッドと密接に関わりながら形成されたと考えられるのである。

以上の議論をふまえるならば、多文化モデルの前提となっている「個々のエスニック文化アイデンティティをもって到来した移民たちは、アロハ・スピリッ

トのもとでハワイ社会に寛容に受け入れられた」という歴史認識は、砂糖革命とその帰結として形成されたプランテーション・ピラミッドの社会・文化的影響を軽視していると言わざるを得ない。ただし、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのハワイにおけるエスニック関係は、プランテーション・ピラミッドによって決定されたわけではなかった。ビッグ・ファイブが栄華を極めた時期のハワイにおけるエスニック関係を観察したアダムズが、「人種に関する非正統的な原則」によって特徴づけられる社会としてハワイを捉えたのは、なぜなのか。オカムラが述べるように、「アロハ・スピリット」が現代のハワイの人びとの個人間関係における重要な文化規範であるならば、そうした文化規範は、ハワイの人びとの間でどのように広がっていったのか。これらの問いもふくめて、プランテーション・ピラミッドという階層的な社会構造によって大きく枠づけられるなかで、ハワイの人びとが日常の実践を通じてどのようなエスニック関係を築いていったのかという点については、稿を改めて論じることにはしたい。

【謝辞】

本稿は、平成23年度および平成24年度の静岡大学学長裁量経費「若手研究者支援経費」の助成を受けて実施した研究の成果の一部である。

【文献】

- Alexander, S. T., G. N. Wilcox, W. O. Smith, and A. Unna, 1883, “Report of Committee on Labor,” *The Planters’ Monthly*, 2(8): 245–7.
- Baker, R. S., 1911, “How King Sugar Rules,” *American Magazine*, 73: 28–38.
- Barman, J. and B. M. Watson, 2006, *Leaving Paradise: Indigenous Hawaiians in the Pacific Northwest, 1787–1898*, Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Bushnell, O. A., 1993, *The Gifts of Civilization: Germs and Genocide in Hawai‘i*, Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Daws, G., 1968, *Shoal of Time: A History of the Hawaiian Islands*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Dorrance, W. H. and F. S. Morgan, 2001, *Sugar Islands: The 165-year Story of Sugar in Hawai‘i*, Honolulu: Mutual Publishing.
- Dye, T., 1994, “Population Trends in Hawai‘i Before 1778,” *The Hawaiian Journal*

of History, 28: 1–20.

Fantasia, R. and K. Voss, 2004, *Hard Work: Remaking the American Labor Movement*, Berkeley: University of California Press.

フーコー, M., 1977, 田村俣訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.

Fuchs, L. H., 1961, *Hawaii Pono: A Social History*, New York: Harcourt Brace World.

Glauberman, S. and J. Burris, 2009, *The Dream Begins: How Hawai'i Shaped Barack Obama*, Honolulu: Watermark Publishing.

Haas, M. ed., 2011, *Barak Obama, The Aloha Zen President: How a Son of the 50th State May Revitalize America Based on 12 Multicultural Principles*, Santa Barbara: Praeger.

原知章, 2005, 「ハワイの沖縄系コミュニティと電子メディア」飯田卓・原知章編『電子メディアを飼い慣らす——異文化を橋渡すフィールド研究の視座』せりか書房, 163–80.

Hawaii Department of Business, Economic Development and Tourism, 2011, “2010 The State of Hawaii Data Book,” (Retrieved November 20, 2012, <http://hawaii.gov/dbedt/info/economic/databook/db2010/db2010.pdf>).

ハワイ日本人移民史刊行委員会編, 1964, 『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会.

Hawaii's Official Tourism Site, 2012, “Barack Obama's Hawaii,” (Retrieved November 20, 2012, <http://www.gohawaii.com/statewide/guidebook/barack-obama-hawaii>).

Hawaii's Plantation Village, 2012, “Hawaii's Plantation Village,” (Retrieved November 20, 2012, http://www.hawaiiplantationvillage.org/images/2010_2011brochure_shrunk_to_fit_letter_sized_paper.pdf).

Higman, B. W., 2000, “The Sugar Revolution,” *Economic History Review*, 53(2): 213–36.

Horne, G., 2007, *The White Pacific: U.S. Imperialism and Black Slavery in the South Seas after the Civil War*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

Jarves, J. J. and H. M. Whitney, 1872, *History of the Hawaiian Islands: Embracing Their Antiquities, Mythology, Legends, Discovery by Europeans in the Sixteenth Century, Re-Discovery by Cook, with Their Civil, Religious and Political History*,

- from the Earliest Traditionary Period to the Year 1846*, Honolulu: H. M. Whitney.
- Jung, M.-K., 2006, *Reworking Race: The Making of Hawaii's Interracial Labor Movement*, New York: Columbia University Press.
- 川北稔, 1996, 『砂糖の世界史』岩波書店.
- Kent, N. J., 1994, "Scouring in the Melting Pot," *Honolulu Weekly*, Feb 2: 3.
- Kimura, Y., 1992, *Issei: Japanese Immigrants in Hawaii*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Lind, A. W., 1980, *Hawaii's People*, Fourth Edition, Honolulu: University of Hawaii Press.
- McDermott, J. F. and N. N. Andrade, 2011, "Introduction," J. F. McDermott and N. N. Andrade eds., *People and Cultures of Hawai'i: The Evolution of Culture and Ethnicity*, Honolulu: University of Hawai'i Press, xi – xxiii.
- eds., 2011, *People and Cultures of Hawai'i: The Evolution of Culture and Ethnicity*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Menard, R. R., 2006, *Sweet Negotiations: Sugar, Slavery, and Plantation Agriculture in Early Barbados*, Charlottesville: University Press of Virginia.
- Menton, L. K. and E. Tamura, 1999, *A History of Hawai'i*, Second Edition, Honolulu: Curriculum Research & Development Group, University of Hawai'i.
- ミンツ, S., 1988, 川北稔・和田光弘訳 『甘さと権力——砂糖が語る近代史』平凡社.
- Murayama, M., 1988, *All I Asking for Is My Body*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 中嶋弓子, 1993, 『ハワイ・さまよえる楽園——民族と国家の衝突』東京.
- Nordyke, E. C., 1989, *The Peopling of Hawai'i*, Second Edition, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Okamura, J. Y., 2008, *Ethnicity and Inequality in Hawai'i*, Philadelphia: Temple University Press.
- Okihiro, G. Y., 2008, *Island World: A History of Hawai'i and the United States*, Berkeley: University of California Press.
- Persons, S., 1987, *Ethnic Studies at Chicago 1905–45*, Urbana: University of Illinois Press.
- Pratt, M. L., 1992, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, London: Routledge.

- Rosa, J. P., 2010, “Race/Ethnicity,” C. Howes and J. Osorio eds., *The Value of Hawai'i: Knowing the Past, Shaping the Future*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 53–60.
- Scott, J. C., 1985, *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, New Haven: Yale University Press.
- Stannard, D. E., 1989, *Before the Horror: The Population of Hawaii on the Eve of Western Contact*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- ストラー、A., 2007, 中島成久訳『プランテーションの社会史——デリ／1870－1979』法政大学出版局。
- タカキ、R., 1986, 富田虎男・白井洋子訳『パウ・ハナ——ハワイ移民の社会史』刀水書房。
- Takaki, R., 1990, “Ethnicity and Class in Hawaii: The Plantation Labor Experience, 1835 – 1920,” R. Asher and C. Stephenson eds., *Labor Divided: Race and Ethnicity in United States Labor Struggles, 1835 – 1960*, New York: State University of New York Press, 33–47.
- 梅森直之編, 2007, 『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』光文社。
- 渡辺祐三, 1986, 『ハワイの日本人・日系人の歴史（上巻）』ハワイ報知社。
- ウェザーズ、C., 2010, 前田尚作訳『アメリカの労働組合運動——保守化傾向に抗する組合の活性化』昭和堂。
- Whitney, H. M., 1875, *The Hawaiian Guide Book*, Honolulu: Henry M. Whitney.
- Williams, E. E., 1942, *The Negro in the Caribbean*, Washington: Associates in Negro Folk Education.
- Wittermans-Pino, E., 1964, *Inter-Ethnic Relations in a Plural Society*, Groningen: J. B. Wolters.
- 矢口祐人, 2002, 『ハワイの歴史と文化——悲劇と誇りのモザイクの中で』中央公論新社。
- 山中速人, 1993, 『ハワイ』岩波書店。
- Yim, S., 1992, “Hawaii's Ethnic Rainbow: Shining Colors, Side by Side,” *Sunday Star-Bulletin & Advertiser*, Jan 5: B1 – B2.